

## 幼児教育に関わる学生のための英語の語彙指導法教育実践報告

ドーマン多田 さおり

*DORMANTADA Saori*

近年急速に進むグローバル化を受けて実用的英語力の向上に高い関心が向けられる中、英語教育の若年化が急速に進み、多くの幼稚園、保育園などでも英語の時間が設けられるようになった。そのような現状の中、幼児教育に関わるものにとって適切な英語指導法を身につけることはこれからより必要とされる資質であり、就職面接の際の強みにもなると考えられる。

本稿は、段階的指導を積み上げることで英語を専門としない幼児教育に関わる学生がより効果的に英語の語彙指導法を身につけられるようデザインされた授業実践の報告である。段階別に学生の気づきの変化を見ることで、段階的指導が学びを前進させているかを考察する。

キーワード：英語専門外の学生への指導、英語の語彙指導、段階的指導、気づき

### 1. はじめに

グローバル化に伴い、2020年からは小学校でも英語が教科化されるなど英語教育への関心が急速に高まっている<sup>1)</sup>。それを受けて、英語を用いた活動の時間を持つ幼稚園・保育園なども急増している。英語のネイティブスピーカーが英語の時間を担当するような場合も数多くあるが、学習者を日常からより理解していて、英語を学ぶモデルとしての役割を担える日本人教員による英語活動への取り組みが見直されてきている<sup>2)</sup>。こともあり、幼児教育の現場を目指す者にとっても英語の指導力は必要な技術となりつつある。

本学の学生は幼児・児童教育に関わっていくことを目標としており、幼児・児童教育を専門に学んでいる反面、英語を苦手としている学生が多く、第二言語習得に関する専門的知識は持ち合わせていない。それゆえ、子ども学ゼミ～Kids English～では英語を専門としない学生を対象に英語指導に必要な英語の基礎力の向上、教材の扱い方・活動進行の習得に取り組んできた。

前期は英語の音に着目させる *phonemic awareness* の指導として歌やチャンツ・ライムなどを多く紹介し、シラブル読みのトレーニングなどを行い、英語特有の

音韻やリズムなどへの気づきを促した。*Phonemic awareness* の指導は、英語特有の音や音韻認識を鍛えることで、単語が音の構成により成り立っていることへの気づきを促し、英語に対する感覚を磨く単語学習の基礎とも言える指導である。<sup>3)</sup>

その後、フォニックスの練習を通して、まず学生自身が英語の音と日本語の音の違いに気づけるよう訓練させたのち、どのように指導する方法があるかも紹介した。

前期の終わりから後期にかけては幼児教育現場でもよく行われるであろう語彙指導を中心に切り抜けてきた。語彙指導では音声教材の上手な使い方、楽しく続けられる反復練習の仕方、子どもたちが楽しく参加出来る主活動のデザインとその進行などが成功のカギとなってくる。これらの活動内容をスムーズにこなすには多くのポイントを把握し、練習を積むことが必要となる。従って、指導法を明示的に伝授するのみでは、やり方をしっかりと理解することは困難であり、また実践に応用できるほど習熟度の高い技術を身につけさせるまでには至らない可能性が高い。それゆえ、講義などの明示的指導に加え、ステップを踏んだ実践計画の作成、実践、ピアレビューを含む振り返り、模擬授業の体験といった細かい段階を経ることで徐々に気づ

きを積み上げていくことが必要であると著者は考える。

ここでは、そのような段階的指導を行う中で、学生の気づきがどのように具体化し、成長していくかを、段階ごとの授業後の感想を比較することで探る。

## 2. 方法

調査期間：2016年9月～2016年12月

調査対象：本学児童教育学科ドーマンゼミ受講者  
1回生17名、2回生6名

手続き：語彙指導の実践①の後に記入した感想と教師による模擬授業を体験した後の感想を比較することで、各段階における学生の気づきやモチベーションの変化を調査する。

## 3. 授業の展開と考察

表1：2016年度の子ども学ゼミ Kids English での英語の語彙指導法教育における段階的指導工程

表1は稿者が作成した英語の語彙指導法教育における段階的指導工程である。本稿では1~6ある指導工程の中の1~5を、以下の3-1から3-5で論ずる。

英語の語彙指導法教育における段階的指導工程	
1	語彙指導法に関する講義
2	活動計画の作成と発表(活動工程の説明)
3	教材作成・活動リハーサルとグループ評価
4	活動実践①
5	教師による模擬授業を体験
6	活動実践②(最終発表)

### 3-1 語彙指導方に関する講義

①学齢による興味に合わせた語彙選択②語彙の提示のために用いられる教材とその提示方法③語彙の練習・記憶・確認アクティビティについての講義を行った。それまでも逐次授業で語彙ドリル、英語学習で用いられるゲームや歌の体験なども行ってきている。

### 3-2 活動計画の作成と発表(活動工程の説明)

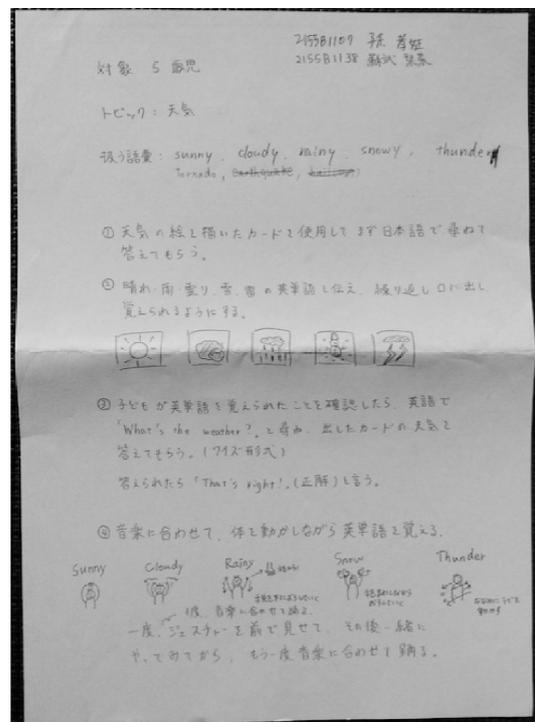
学生は2人1組になり、語彙の導入・反復練習・主活動を考える。授業計画を立てたのち、各グループが教師に授業の進行を口頭で説明し、教師はそれぞれに詳しくアドバイスを与え、そのアドバイスに伴い授業計画の修正が行われた。

その後、各グループがプロジェクターに授業計画を投影し、クラスに向けて説明を行った。その説明に対し、教師が最後に評価・質問を全体に向けて行うことで指導上の注意点や改善すべき点を全体に提示するようになった。

この時点で学生が作成した授業計画では語彙リストのスペルミスが目立つなど、作成にあたり細かい注意が行き届かない部分や、学んだことを具体的に自分たちの活動計画に落とせていない様子が伺えた。

#### 【事例①】：2人1組で作成した活動計画

この計画書は1) 対象児童年齢、2) トピック、3) 扱う語彙、4) 活動工程で構成されている。



### 3-3 教材作成・活動リハーサルとグループ評価

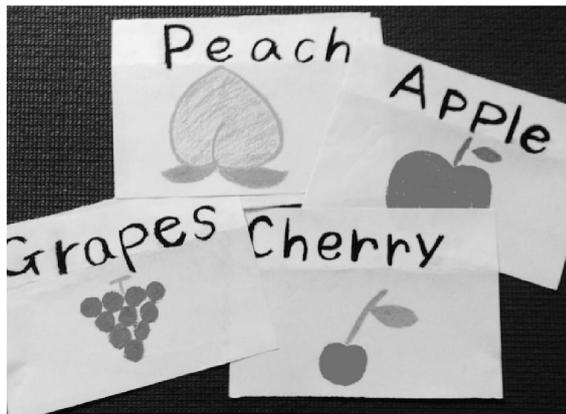
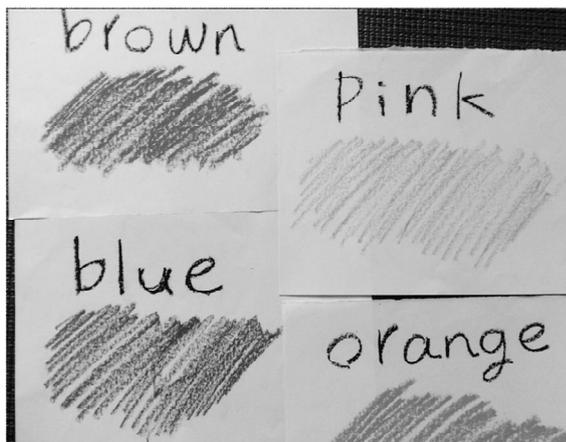
活動計画に従って教材準備と授業進行を考えた。単

語カードは手作りで作成し、一緒に使うオーディオ教材は教師が学生のスマートフォンを使い録音した。

単語カードを作る際にスペルを確認してから作成するよう声がけしたにもかかわらず、記憶を頼りに適当なスペルを書いてしまうグループが目立った。また、各グループ活動のリハーサルを行う時間があつたが、過去の講義である程度見本を見せてきたにも関わらず、いざ実践するとなるとどうして良いかわからず活動準備が進まないグループが多く見受けられたため、グループ同士で発表を見せ合い、アドバイスを与え合う活動に切り替えた。

リハーサルの時よりは活発に活動を行ったものの、友達の未熟な部分に関してアドバイスできるまでには至っていないよう見受けられた。

### 【事例③：学生の作成した教材例（ピクチャーカード）】



### 3-4 活動実践①

活動実践は大きく2グループに分かれ、それぞれで発表と参加（幼児役）を行った。それぞれのグループ

が作成した教材を使い、自分たちで立てた計画に従って実践を行った。

準備が十分にできていなかったグループが多くあり、実践の最中に打ち合わせをせよしまつたり、活動計画を見直す場面が多々あつたりと、計画通りスムーズに行えない様子が見受けられた。

発表者は活動を行った感想を記入し、参加者は参加した活動の教材・流れ・指導者の指示の仕方について良かったところと改善点を記入した。

自分で実際にやってみて、またクラスメートの発表を見ることで、活動を行うにあたって大事な点について多くの気づきがあつたことが感想から見受けられた。この感想の中で学生から上がった意見に教師の見解を合わせリストにしたもの（表2）を次の授業で振り返りとして使用することで、気づきの定着を図つた。

表2：感想の中で学生から上がった意見に教師の見解を合わせリストにしたもの

<p>教材について：</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① スペルは記入前に必ずチェックしましょう。間違つたものを提示することは間違つた知識を埋め込むことにつながります。</li> <li>② スペリングを統一させましょう。最初を大文字にするのか、全て小文字で記入するのか、教材ごとに統一しましょう。最初の音に注目させたいなら大文字で始める、用途なども考えてみると良いでしょう。</li> <li>③ 単数、複数絵と一致させましょう。基本は（“grapes”や“pants”など複数系でしか言い表せないものを除いて）全て単数で絵を用意すると後で複数を教える時にやりやすいでしょう。</li> <li>④ 一番速くに座っている児童にもきちんと見えるものを用意しましょう。色の濃さや表記の大きさなど、実際に離れたところから見て確かめましょう。</li> <li>⑤ 教材の見せ方を工夫しましょう。カードなどを使うときは指で表記を覆ってしまっていないか、立ち位置で見えない子が出ていないか確認しましょう。またスムーズに見せられるよう教材に工夫（リングでまとめる、パウチするなど）したり、扱い方を事前に練習しておきましょう。</li> </ol> <p>教師の指示について</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 大きな声で、はっきりと話しましょう。</li> <li>② 今、子どもが何をすべきかをしっかりと示しましょう。聞く時なのか、発言する時なのか、どのような発言を求めているのかを子どもがしっかり理解できるようにしましょう。</li> <li>③ 子どもが課した課題を達成できたらそのことを褒めてあげましょう。具体的にできたことを褒めてあげられるとなお良いでしょう。（大きな声で言えだね、など）</li> <li>④ どのような言い方をするか、慣れるまでしっかり準備しておきましょう。英語はフレーズを事前に調べて上手に言えるよう練習しておきましょう。日本語も子どもに伝わる言い方かどうかしっかり吟味しましょう。</li> <li>⑤ 日本語の使い方に注意しましょう。英語の日本語訳をしてしまうと子どもは英語をわかるうとしなくなつてしまいます。日本語は英語ではどうしても難しい指示の場合のみ使い、なるべくジェスチャーや視覚教材を指すなどして日本語を使わないで良いよう工夫しましょう。</li> <li>⑥ 活動の最初の指示は、教師が複数いる場合、日本語で言ってしまうのではな</li> </ol>
--

く、教師同士で見本を見せることでわからせるようにしましょう。

- ⑦ より難しい課題へ子どもが自信を持って取り組めるよう、活動へ移る前にしっかり練習を積んであげましょう。準備をしっかりさせることで成功させてあげると英語を好きになれたり、自信を持つことにつながります。まだ上手に言えないと思ったら練習を増やしたり、もう十分言えると思ったら減らしたり臨機応変に対応しましょう。

活動の流れについて

- ① 活動中に不必要な間が空いたり、教師同士でその場で打ち合わせするなどしてしまうと、子どもの集中はすぐにそれてしまいます。集中を途切れさせないよう流れをしっかりリハーサルして、どんな言葉で指示をするのか、どのような動きをすれば良いのか理解して挑みましょう。
- ② やさしい課題から難しい課題へという流れができているか、活動の難易度や手順をしっかり確認しましょう。
- ③ 子どもたちの性格や特性などにも気を使うとより流れがスムーズになることもあります。(活発な子と大人しい子が混ざるようグループ分けをする、得意な子が物足りないと感じていたら他の子の補助をお願いするなどなるべく皆が充実する状態を作る)
- ④ 子どもたちがすべての活動にやる気を持って取り組める工夫を常に考えておく。(聞かせる活動であれば後でクイズを出すからしっかり聞くよう伝える、単語の口頭練習であれば2回目はスピードを上げて読ませるなど)。

### 3-5 教師の模擬授業を体験

1～4の工程を経て、活動進行において重要である点が学生の中で浮き彫りになってきたところで教師による模擬授業を体験させた。

自分たちができなかった部分や、ここをもっとこうしたいという具体的な課題に着目できている状態で模擬授業を体験することで、効果的と思われるアプローチがどのように行われているかなど、より細かな部分への気づきが生まれるのではないかと狙いがあった。

模擬授業ではアイスクリームのフレーバーの語彙を用いて、好きなアイスクリームを買いに行くというコミュニケーション活動を主活動として紹介した。この授業は著者が実際に5歳児に向けてデザインし、行なったことのある授業であり、幼児や保護者からも好評であった活動の一つである。

語彙の導入時には2年生の学生に協力を得てティーチャートーク(教師同士の英語でのやり取り)を行うと同時に視覚教材を用いることで、どのようにすれば日本語を使わず、ごくごく限られた英語で幼児に話の内容を伝えることができるかを紹介した。

そのあとに行われる語彙のドリルではオーディオ教材を用いて教師が幼児と一緒に声を出したり、リズム読みをしたりすることで飽きずに楽しく繰り返しの練習ができることを示した。

主活動であるコミュニケーション活動に入る前には、ティーチャートークにより幼児にやりとりの見本を見せることでこれからやることを日本語での説明なしでも示せる例を見せた。また、幼児役の教師がわざと間違えて気をつけるべき点に気づかせることも付け加えた。加えて活動開始前にターゲットフレーズの繰り返し練習をさせることで幼児が自信を持って主活動に取り組めることも体験させた。

コミュニケーション活動では、アイスクリームを買いに行くという想定で、まずアイスクリームコーンが描かれたカードを配り、それを持って教師のところに行き、自分の好きな味をオーダーするとアイスのシールを貼ってもらえるという活動を行った。

教師が2人いることで、1人がカードを配っている間にもう一人が買いに来た幼児に対応できたり、買い終わった幼児に何を買ったか聞きに入ったりするなど、幼児の待機時間を少なくし、より英語に触れさせる時間を増やす方法も見せた。

活動後すぐに活動を体験した感想を全員に書かせた。



活動後の感想では、どのようなアプローチがどのような効果を生んでいたかというような具体的な表記が多く見受けられた。詳しくは結果と考察の部分で触れていく。



#### 4. 結果と考察

ここでは段階的指導において学生たちの気づきがどのように変化していったかを考察する。具体的には、1) 学生が語彙指導の実践①を行った後に感じた(気づいた)改善点と学生が教師の模擬授業を体験して授業づくりにおいて大事だと感じたところ(気づき)の項目の比較(表2と表3参照)、2) どれだけの学生がその項目を記入したか(表2と表3参照)を考察の対象とする。

A~Eは、学生が語彙指導の実践①を行った後に感じた(気づいた)改善点と、学生が教師の模擬授業を体験して授業づくりにおいて大事だと感じたところ(気づき)の項目とで共通する項目である。注目すべき点としては、語彙指導後の時点で気づきがあったものの内容的に曖昧であった部分が、模擬授業を見学したことでより具体的な気づきへと変わっている項目がいくつか見受けられるところである。なお網がけされた箇所は、学生が語彙指導の実践①を行った後に感じた(気づいた)改善点と、学生が教師の模擬授業を体験して授業づくりにおいて大事だと感じたところ(気づき)で共通しなかった項目である。

項目Aの語彙指導の実践①後の感想では、5名の学生が「子どもたちがしっかり活動できる進行をするべきであると感じた」とあげているが、このように自分たちが行った進行の未熟さを感じているものの、具体的に何が足りていないかが見えていないような記入が多かった。しかし、模擬授業体験後の感想では「難易

度を少しずつ上げていくことでやる気が持続すると感じた」、「しっかり繰り返し練習してから主活動を行うことが大事だと感じた」、「繰り返し練習にバリエーションを持たせることで飽きずに続けられると感じた」など、具体的にどのように進行すれば「子どもたちがしっかり活動できる」のかを考えることができていた。また、人数も10名と実践①後には活動の進行に注意を置いていなかった学生も進行についての気づきを得ることができていた。

項目Bの語彙指導の実践①後の感想では、2名の学生が「全員に満遍なく活動させることが必要だと感じた」と、子どもの活動への参加度の偏りを問題点としてあげていたが、模擬授業体験後には倍の4名の学生が「子供達に発言させる機会を多く持つことが大事だと感じた」「個別対応をすると子どもが喜ぶと感じた」など具体的などのようにすれば参加度の偏りを減らすことができるかに注目できていた。

また項目Cでは8名の学生が「楽しい雰囲気づくりができなかった・できたら褒めることが必要であると感じた」と語彙指導の実践①後の感想で述べているがここでも楽しい雰囲気をどのように作れば良いのかなどについて詳しく言及できていなかった。しかし模擬授業体験後には9名の学生が、「明るい表情をすることで楽しい雰囲気が作れると感じた。」

「ゆっくり話すすとわかりやすいと感じた。」「しっかり褒めることは大切だと感じた」など、具体的にどのような働きかけが授業の雰囲気をよくしていくのかを考えることができていた。

項目Dの「もっと子どもたちが主体として動ける授業づくりをしたいと思った」に着目していたのが語彙指導の実践①後の感想では、1名の学生であったのに対して、模擬授業体験後には11人と、半数近くの学生が、子どもが主体となって動ける授業づくりへの価値を感じていた。具体的には好きなアイスクリームを買いに行く活動がとても楽しく、子どもが喜びそう・達成感があったというコメントが多く見受けられた。Brewster and Ellis(2005)も自分の興味と関連性のある語彙を子どもは学びたいと思い、また学習や記憶が最も容易であると述べている<sup>4)</sup>。項目Eについては特筆すべき点がないのでここでは取り上げない。

表3：授業の展開3-4段階を終えての感想

学生が語彙指導の実践①を行った後に感じた(気づいた)改善点		
A	子どもたちがしっかり活動できる進捗をするべきであると感じた	5
B	全員に満遍なく活動させることが必要だと感じた	2
C	楽しい雰囲気づくりができなかった・できたら褒めることが必要であると感じた	8
D	もっと子どもたちが主体として動ける授業づくりをしたいと思った	1
E	子どもたちにわかりやすい指示を出すことが大事だと思った	6
	授業計画をしっかりと立て、打ち合わせを事前しておくことが必要だと感じた	6
	スベリ・発音などをしっかりと事前準備しなければいけないと感じた	2
	質疑の際、緊張して思ったより早く進行できなかった	3
	準備不足により、不必要な時間が取られてしまった	1

表4：授業の展開3-5段階を終えての感想

学生が教師の模擬授業を体験して授業づくりにおいて大事だと感じたところ(気づき)		
A	難易度を少しずつ上げていくことでやる気が持続すると感じた しっかり繰り返し練習してから主活動を行うことが大事だと感じた 繰り返し練習にバリエーションを持たせることで飽きずに続けられると感じた	10
B	子供達に発言させる機会を多く持つことが大事だと感じた 個別対応をすると子どもが喜ぶと感じた	4
C	明るい表情をすることで楽しい雰囲気を作れると感じた。 ゆったり話すとうわりやすいと感じた。しっかり褒めることは大切だと感じた	9
D	子供達が主体となって動ける活動は大事だと感じた	11
E	手順を分かりやすくすることが大事だと感じた	1
	先生が主体になることで次の活動が理解しやすいと感じた	16
	幼児の好きな・日常に近いテーマを取り入れることで楽しく活動できると感じた	10
	緊張しない・慣れが空かないことで多く英語に触れられると感じた	3

5. まとめ

本ゼミに在籍する学生は自らが幼児の時に英語教育を体験したことはなく、実際に授業の様子を目にしたこともないだけに、講義を聞いただけの段階では、理解はできていても実際に活動がどのように行われるかピンとこない様子を見せていた。

クラスメートと協力し、授業計画を立てている際は、やはり幼児教育を専門としているだけに活動としては幼児が好むようなものを考えつくが、どのように英語を習得させるかに関しては個別に説明を行っても理解が難しい部分があった。

実際に前に立って活動を進行させると同時にクラスメートの活動実践を観察することで初めて(特に複数で指導を行う際)綿密な打ち合わせの重要性やしっかりと準備を行う大切さを感じ取っていた。さらに反省事項をまとめて全体で見直し、問題点の言語化を図ったことで漠然としていた課題をより明確にできたので

はないかと考えられる。

教師の模擬授業には全員が楽しく参加している様子が伺えた。感想には、自分も表情豊かにしたい、楽しい活動を考えたいなど前向きな姿勢を書いている箇所も多々見られたことから、段階的指導によって理解を深めることでモチベーションの向上にもつながるのではないかとという見解を得た。

6. 今後の課題

これらの気づきを生かして、後期最後(活導実践②)に行われる最終発表への準備が始まっている。

最終課題は語彙活動から絵本の読み聞かせへの流れで、4人1組で発表する。さらに綿密な打ち合わせと役割分担、事前準備ができていなければスムーズな進行が望めないことから学生たちにとっては大きなチャレンジとなるが、ここまで積み上げてきたことを生かして是非成功させて欲しい。

今回は最終発表準備までの積み上げとしての段階的指導とその効果について論じたが、本質的な効果を見るためには、最終発表での学生たちのパフォーマンスと実践後の自己評価がより飛躍したものになっているかを検討することが必要となってくる。

参考文献

- 1) 初等中等教育局国際教育課外国語教育推進室「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」(2013)
- 2) 吉田研作「小学校教員の意識の変化」第2回 小学校英語に関する基本調査 (2010)
- 3) リーパー・すみ子「アメリカの小学校ではこうやって英語を教えている」(2008)
- 4) J. ブルースター / G. エリス 『「小学校英語」指導法ハンドブック』(2005)

ピアスーパーバイザーからのコメント

幼児教育を志す本学の学生は、対象者の反応を見ながら、その興味を捉え、場を盛り上げていく能力が常に鍛えられ、その工夫された活動には素晴らしいものがある。しかし、一方で、丁寧な準備、活動の緻密な

---

分析を苦手とする学生もいるなか、初等教育に導入される「英語」にいかに対処するかは、学生にも、養成校にも、大きな課題である。

本稿では、英語を得意としない学生たちがリハーサルを重ね、互いの様子から学びながら模擬授業を振り返り、稿者の練り上げられた活動を目の当たりにすることで、気づきの質が変わっていく実態が報告されている。この段階から最終発表にどのように結びつくのか、続稿での報告が期待される。

(担当：三木麻子)